

Title	ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教(2)
Author(s)	宮本, 悟
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2 : 12-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3703
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教 (2)

宮本 悟

前回で報告したように、宗教的差別を理由にして1994年12月にカレン民族同盟 (KNU) と民主カレン仏教徒機構 (DKBO) に分裂したカレン族の政治団体であるが、実際にこの両団体がキリスト教徒と仏教徒で争っているとは理解するのは一面でしかない。なぜなら、DKBOは仏教徒と名乗っているが、KNUにも一般人には仏教徒が多いからである。KNUとDKBOの対立はキリスト教徒と仏教徒の対立という側面よりも、ミャンマー政府と対立しているKNUと、ミャンマー政府と協力するDKBOの対立と理解した方がより実情を反映していると思われる。

ただし、DKBOにも、ミャンマー政府との協力に反対する勢力も出始めた。2010年11月8日にDKBOの軍事組織である民主カレン仏教徒軍 (DKBA) の部隊が、メーソットの対岸のミャンマー側の町・ミャワディーを武力で占拠した。KNU事務総長であるジッポラ・セインによると、DKBA300名とミャンマー政府軍の戦闘であるという。DKBAは、2010年8月18日に結成されたミャンマーの国境警備軍に編入されることになったが、それに反対するDKBAの部隊がミャワディーを占拠したとのことである。ミャワディーはすぐにミャンマー政府軍によって取り返されたが、この事件のために2011年9月現在でも原則として外国人はメーソットからミャワディーに行くことがで



メーラ・キャンプの外観

きない。

KNUとDKBOの力関係であるが、やはり現在でもKNUがDKBOをはるかに上回っているようである。実際にミャンマー側にあるDKBOの村を見ると、KNUの支持勢力が多いメーラ・キャンプなどに比べてはるかに規模が小さい。KNUの支持勢力が多いメーラ・キャンプには3万から5万名が居住しているのに対して、DKBOの村はその10分の1ぐらいの規模である。

ただし、一人当たりの財政は、おそらくDKBOがKNUよりも潤っているであろう。なぜならDKBOは、ミャンマー政府によって支援されているからである。実際に、DKBOの村の建物は、数は少なくとも、メーラ・キャンプなどに比べたらはるかに条件が良い。さらに、指導層が麻薬取引を禁じているKNUと異なって、DKBOは麻薬取引を禁止しておらず、その収入もあると考えられる。そのため、DKBOの生活に慣れてKNUからDKBOに寝返る人々もいるとのことである。

このような内部対立もあって、東輝信氏によるとカレン族難民のコミュニティーは崩れ始めているという。フリー・フォトジャーナリストでミャンマー取材してきた宇田有三の著書にも、カレン族であってもタイで平凡に暮らしていきたい娘とミャンマー政府と戦おうとする父親の葛藤が紹介されている。思想やイデオロギーのみならず、世代や性別の違いによって対立が表面化しつつあるカレン族難民のコミュニティーは先行きが明るいように見えない。さらに、2005年から国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR: The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees) が始めたタイにいる難民の第三国定住プログラムによって、海外への移民を希望するカレン族が後を絶たない。カレン族を含むタイ・ミャンマー難民は年間約1万名のペースでアメリカやオーストラリアなどに移民している。まだ数は少ないが、日本にもカレン族の難民が移民し始めている。こ

れによって、在タイのカレン族難民コミュニティの崩壊はさらに進んでいる。2011年にも約1万人の難民が海外に移民する予定である。

ただし、ミャンマーからの難民は現在でも増えている。そもそもカレン族が現在どれぐらいミャンマーにいるのかははっきりしない。現在、KNUによるとミャンマー国内のカレン族の人口は700万人であるが、1993年にミャンマー政府が発表した人口は250万人である。両者の発表には大きな差があるので、実際にカレン族の人口を推定することは難しい。いずれにせよ、カレン族も含めて多くの人々がミャンマーからタイに逃げ続けており、メーソットではタイ人よりもミャンマーから来た人々の方が多く暮らしているといわれている。そのような彼らの多くは、日常生活は何とかなるとしても、まともに医療を受けられる所持金はない。そのような貧しいミャンマーからの難民のためにボランティアで設立されたメータオ・クリニックという医療施設がメーソットにある。

メータオ・クリニックは、1988年に設立された。カレン族出身の女性医師でもある創設者のシンシア・マウンは、2002年にアジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を受賞し、2003年に『タイム』誌の「アジアの英雄」の一人に選ばれた。さらに、2005年にはノーベル平和賞にノミネートされたこともある。



DKBOの村の入口(洪水で国境の川があふれている)



メータオ・クリニックの内科病棟の様子

念のために言えば、メータオ・クリニックはカレン族だけを患者にしているのではない。その患者にはシャン族やカチン族などのミャンマーの少数民族のみならず、ビルマ族もいる。ただし、ここに来る患者の大部分がミャンマーから来た貧しい人々であることは間違いない。医療施設が脆弱なミャンマーからわざわざ越境してきてメータオ・クリニックに来る人もいる。

もちろん立派な施設や設備がある医療施設ではない。まるで野外科院である。入院病棟でも窓にはガラスが入っておらず、蚊や蠅が自由に入って来れる。手術室もあるが、簡単な手術しかできない。東輝信氏によると、一時は日本人のボランティア医師によって盲腸の手術もしていたそうだが、現在では帝王切開もできない。また、ミャンマー側の山や村周辺では対人地雷を使用しており、犠牲者も数多いので、メータオ・クリニックには義足製作室が設けられている。

メータオ・クリニックの診療費は原則無料であるが、現在では初診料30バーツ（日本円で約75円）だけ受けている。しかし、その初診料さえ払えない患者もいるという。メータオ・クリニックの運営で最も負担となっているのは、患者の外部への搬送費であるとのことである。メータオ・クリニックで治療できない患者は、タイの大きな病院に搬送する必要がある。ミャンマーから来た人々にタイの病院の治療費を支払う能力はまずな



メータオ・クリニックの入口(公に認められた施設ではないので表立った看板はない)

い。メータオ・クリニックは、その搬送費とその病院での治療費を肩代わりしている。それは、もともと資金に乏しいメータオ・クリニックにとって大きな負担となっている。

運営資金は、ほとんどが寄付によって成り立っている。日本でも、このメータオ・クリニックを資金的に支援するNGOが存在する。例えば「メータオ・クリニック支援の会」(JAM)である。その他にも様々なNGOがメータオ・クリニックを支援している。メータオ・クリニックでボランティアとして働いている日本人もいる。メータオ・クリニックの医師もボランティアによって成り立っている。それらの医師はたいていキリスト者であるという。しかし、増え続けるミャンマーからの難民とその患者のために、メータオ・クリニックは資金と医師不足によって、厳しい運営を続けているのが実情である。

(追記：2012年1月12日にKNUとミャンマー政府は停戦に合意し、60年以上にわたった戦闘は収束に向かう見込みである。)

参考文献

「NGOメータオ・クリニック支援の会」 <<http://www.japanmaetao.org>> (2011年10月20日アクセス)

宇田有三『閉ざされた国ビルマ：カレン民族闘争と民主化

闘争の現場をあるく』(高文研、2010年)。

"Fighting in Myanmar ethnic area after election protest", *MySin Chew*, November 8, 2010 <<http://www.mysinthew.com/node/47677>> (2011年10月20日アクセス)

"Karen National Union" <<http://karennationalunion.net/index.php>> (2011年10月20日アクセス)。

(みやもと・さとる 聖学院大学総合研究所准教授)